学力向上フロンティア事業中間報告

（　都道府県　福島県　）

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	飯野町立飯野小学校							
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	計	教員数
学級数	１	２	１	１	１	１	６	１１
児童数	２９	３４	３１	２９	３７	３３	１９３	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

『　個　と　学　び　』

～学びの中で一人一人の力を伸ばすための指導のあり方～

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

○　全学年　算数科

○　設定の理由

・本校の児童の実態の陥没点である思考・判断・表現を伸ばしやすい教科である。

・指導内容の系統性が明確であり、全学年及び中学校まで見通しての指導ができる。

・指導内容に連続性があり、発展的な学習や補充的な学習など、個に応じた指導のための教材開発等に取り組みやすい。

（２）年次ごとの計画

◎研究仮説

一人一人の力をとらえ、学び合いを生かしながら個に応じた学習活動を展開していけば、学ぶ喜びを味わわせ、一人一人の確かな力を伸ばすことができるであろう。

◎めざす児童の姿

①　自ら問題に気づこうとする姿

②　問題のポイントを捉え、自ら解決の見通しを考えようとする姿

③　問題に対してよりよい解決をするために、友だちと協力して最後までねばり強く解決する姿

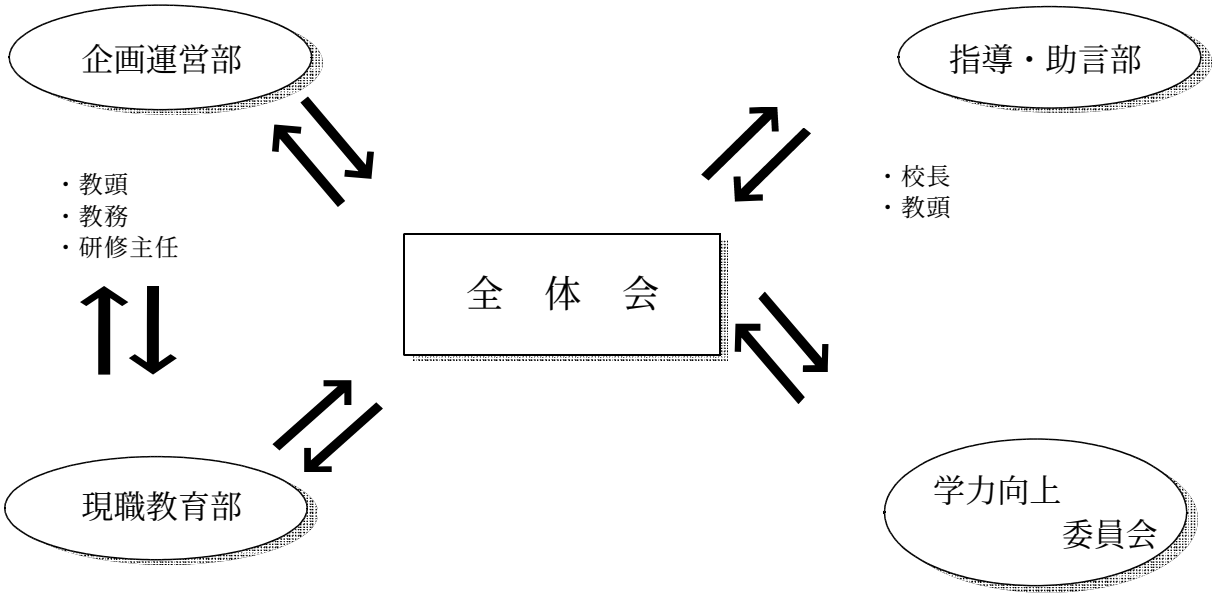
④ 自らの学習の足跡を振り返り、確かめようとする姿

⑤ より、高い目標に向かおうとする姿

平成15年度	研究の重点 ～個をみつめる～ 1　教科の分析及び一人一人の実態の把握 ・算数科における「確かな力」の定義付けとその共通理解 ・事前テストによるレディネス調査 ・チェックリストの活用と変容の記録 ・把持テストによる定着度の把握 ・全校一斉テストの実施とその分析 ・学力テスト（ＮＲＴ・ＣＲＴ）の実施と分析 2　テーマに即した手立ての構想とその実践 ・研究授業の実践（全学年） ・手立ての検証とその検討 ・評価方法の工夫 3　授業研究会を実施して参加者の助言をもとに研究の精度を高めるとともに学力向上フロンティアの趣旨を広める。 4　資料の収集と先進校での研修 ・各種参考資料及び文献などの収集・提示 ・先進校視察、情報提供

平成16年度	研究の重点 ～個を伸ばす授業づくり～ 1 個の力を伸ばすためのさまざまな学習活動の展開 ・生活経験や体験を生かした学習活動の実践 ・個のみとりの精度を高め、学習活動に生かす指導 ・理解力と学習意欲を高めるための教材の開発とその活用 ・学習の達成度を把握するための各種調査並びにテストの活用 2　テーマに即した手立ての構想とその実践 ・研究授業の実践 ・個を生かすための評価の実践と効果的な活用 3　授業研究会を実施して学習指導法について研究を深めるとともに学力向上フロンティアの趣旨を広める。 4　先進校研修 ・指導法などの情報交換 ・研究体制などの見直し

（３）研究推進体制



①企画運営部
- 研究計画の企画・立案
- テーマ、仮説の原案づくり
- 研究授業案の形式作成
- 各種連絡調整

③指導助言部
- 各種研修における指導助言
- 参考資料の収集提示
- 講師および助言者の招聘

②学力向上委員会
- 基本的学習習慣の育成計画
- 学力の基礎基本の内容の吟味
- 基本的な学力の向上実践計画の作成

④現職教育部
- 全体会の進行、記録
- 研究授業の事前事後協議会の司会、記録
- 実技研修会の実施

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果（学力検査の実施が１月末であるため、客観的データは後日集計）

今年度の研究の重点は、「個をみつめる」 ということであった。児童一人一人の実態の内容をふまえた上で、一単位時間の中で何をどのように指導すればよいか、またそのためにどのような手だてをとればよいかを、試行錯誤しながらそれぞれが授業に取り組んできた。

中でも、授業案の形式の検討や達成基準の分析、個に応じた手立ての検証については、特に力を入れて研究を進めてきた点である。

研究授業の場合だけではなく、日常的な学習の中にも生かせることができる手立てを創意・工夫すること、さらにはその手立てを修正・改良することができたことが、今年度の研究の最大の成果であったと思われる。

<<授業案の形式の検討>>

①どのような手立てがどの場面で使われているかをわかりやすくするために
→学習過程の中に手立ての欄を作成し、実践・検証することにより、その手立ての効果や改善点などを吟味することができた。

②単元を通して育てたい力をより明確なものにするために
→四観点の目標や児童の実態の内容だけでなく、「指導にあたって」という部分を付け加えることにより、教師の思いや指導の進め方などが、より明確なものにすることができた。

③単元指導計画及び評価規準・達成基準のマトリックスの作成
→単元全体の構想や評価、一単位時間の中での評価規準をより明確にすることができた。さらには、達成基準を設定することにより、場の設定や手立てをより具体的に検討することができた。

④現職教育テーマとの関わりを意識するために
→授業は常に仮説の検証の場という意識が生まれ、「個への対応」「学び合いの場の設定」の２点を重視した研究授業ができた。

<<達成基準の分析>>

単元全体を通して、どのような力を育てるか、一単位時間の中でどのような点を評価すればよいかが、この評価規準・達成基準のマトリックスを作成することによって、より明確につかむことができたと考えられる。

<<　学習過程の段階における主な手立て　>>

各学年とも、仮説に基づいた様々な手立てに取り組んできた。下位児への手立てだけでなく、上位の児童の活動が停滞しないよう、創意工夫を行ってきた。

◎解決の見通しが持てない児童・つまずきのある児童に対しての手立て
①半具体物の活用　②小集団指導　③机間指導による個別指導

◎課題解決における支援の手立て
①机間指導による個別指導　②ヒントカード　③小グループ活動

◎習熟・発展的な内容の指導の手立て
①習熟度別学習問題　②机間指導による個別指導　③発展的な課題の提示

◎学び合いを生かした具体的な評価の手立て
①児童の発表やグループ内での活動を通しての相互評価
②学習プリントへの記入などによる自己評価
③机間指導における達成基準に基づく教師の評価

２．今後の課題

☆今年度の実践をふまえ、今後の課題として挙げられるのは以下の４点である。

①個々への手立ての内容・方法の工夫

→今年度の実践で用いた手立てをさらに検討・改善することによって、個の力を伸ばせるのではないか。

②評価の内容をより密度の高いものに

→今年度活用したマトリックスの形式や内容、評価方法を吟味・検討し、個を生かす評価ができるのではないか。

③学習の達成度を把握するために

→習熟度別の学習形態と内容を検討し、実践することによって、個に応じた指導をさらに進めることができるのではないか。

④授業力を高めるために

→授業作りの研修や、授業実践の日常化により、個の力を伸ばす授業が実践できるのではないか。

次年度も、今年度同様に授業実践の検証が研修内容の中心となるが、子ども一人一人の学びを生かしつつ、日々の授業を実践していきたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取り組み

・漢字計算テストの実施（全学年、年に５回、内容は自作）
・NRT 学力テストの実施（１月末）
・CRT 学力テストの実施（２月末）

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

月	日	場所	内　　容	対　　象
2	5	本校	フロンティア事業授業公開	県北地区小中学校

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新設校　□１４年度からの継続校
【学校規模】　☑6 学級以下　□7～１２学級
□１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上
【指導体制】　□少人数指導　□ T.T による指導
□一部教科担任制　☑その他
【研究教科】　□国語　□社会　☑算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　□有　☑無